

## 「梅棹忠夫著作集」全22巻解題：第21巻 都市と文化開発

著者	中牧 弘允
ページ	140-140
発行年	2011-03-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/4867">http://hdl.handle.net/10502/4867</a>

## 都市と文化開発



\* 都市と文化開発の三〇年

\* 都市神殿論 \* 田園都市国家構想

\* 文化開発と文化行政 \* 湖国の文化と開発

「文化開発」とは梅棹忠夫の造語であり、一九六〇年代なかばの「第二の平安京づくり」で誕生した。実際、文化開発は一九七〇年の大阪万博で一挙に盛り上がり、梅棹の運命も一変させた。

梅棹は万博では裏方をつとめたが、民博の設立では表舞台の主役を演じた。その一方、一九七〇年代には総合研究開発機構(NIRA)を拠点に、国や自治体の文化行政にかかわる理論的な方向づけをおこなった。その最たるものは文化行政と教育行政の切り離しである。それを裏づける理論として展開したのがチャージ(充電)とデイスチャージ(放電)である。教育はチャージであるが、文化はデイスチャージであり、「遊び」であると言いつつ切った。

以来、教育委員会をはなれ首長のもとにおかれた文化行政部局が全国各地でつぎつぎに新機軸を打ち出していった。文化開発の主眼は、行政主導によるハードの充実であった。ソフトはついてくると見なされていた。「行政の文化化」がさげばれたのもその頃である。

一九八〇年代になると大平正芳首相のもとで「田園都市国家構想」の政策立案の立役者をつとめた。「新京都国民文化都市構想」はその壮大なる成果であったが、大平首相の急死によって宙に浮いた。八〇年代後半にはNIRAの委託により文化首都の研究にも打ち込んだが、目にみえる成果にはつながらなかった。梅棹は後年、都市政策に関しては「悲劇のプランナー」であったと自嘲的にかたづけている。

しかし、都市の文化開発にはたし梅棹の役割りは刮目に値し、とくに文化都市行政の理論面ではいまでも絶大な影響をあたえている。「文化投資は経済的停滞期のほうがやりやすい」「文化大国をめざし、現在の国力を文化のかたちで後世につたえるべき」といった見解はあらためて検討すべき課題かもしれない。戦後、経済優先で走りつづけてきた日本に文化を冠した開発を提言した先見性にこそ注目すべきであろう。(中牧弘允)